

「児童の世紀」を振り返る

— その七 —

本田 和子

子どもと深層心理学の運命

子ども関係者たちが、ユング派の理論や昔話解
釈、あるいは箱庭療法などに関心を示し始めたの
は、いつ頃だったろうか。それは、恐らく、一九七

〇年前後。パラダイムの転換が唱えられ、ポスト・
モダンなどという華やかなキャッチフレーズで、近代
合理主義への批判が賑々しく繰り広げられていた時
期と連動しているのではないか。わが国ユング派の
総リーダー河合隼雄の『ユング心理学入門』が人々

の手に取られ、普遍的無意識とか原型などという不思議な概念が、理解し難く捉えにくいものながら何かしら新鮮に関係者たちを魅了し始めたのがこの時期だからである。

フロイトに始まる「無意識」概念とその応用である解釈理論は、当初は治療理論として、後にはそれらの実践にも勝る文化運動として、今世紀初頭の西欧諸国に展開され、とりわけアメリカ合衆国では、一九二〇年代には早々と通俗化されている。その結果、大衆レベルの受容を容易にして、その社会的地位を確かなものとした。さらに、第二次大戦中にウィーン学派の精神分析家たちが亡命者として大量にアメリカに流れ込んだこともあって、彼の地の精神分析運動が、フロム、エリクソンなどのスター学者を輩出させ、理論・実践の両面で華々しい展開を見せたことは周知であろう。また、精神分析学と人類学や社会学との結合が、今世紀の知的世界に与えた

影響の大きさ・豊かさも否定されるべくもない。

ところで、わが国の場合、今世紀前半にはフロイトの翻訳・紹介が行われ、精神病理学の世界に導入さ

れ、一方、新奇なものに引かれる芸術批評家たちによって精神分析的批評が試みられ始めてはいた。しかし、フロイトが「ヒステリー研究者」と狭く位置付けられたことや、「幼児性欲の承認」を要件とする正統的フロイト派の主張は、わが国の子ども関係者になじみにくいものだったらしく、子ども関係者たちの間では、久しく不問に付されていた感があった。

もつとも、フロイトの名前そのものは、一九〇八年（明治四一）年の『児童研究』第一二巻第九号、あるいは翌年の第一三巻第二号などにちらりと顔を覗



かせている。たとえば、医学士菅原道夫による「小児の性欲に就いて」という連載記事のなかに、小児性欲に関する代表的文献として「独逸では Freud の著書」が上げられ、また、ヒステリーや神経衰弱症のような官能性神経疾患の原因を生殖興奮と関連付けて考えるという点で、フロイトの説も、「一面の真理かも知れぬ」と肯定的に紹介されたりもしているのである。

この時期、わが国の医学会や教育界の一部に「子どもの性欲」を巡る問題意識が発生し、「性欲論」や「性欲教育論」が勃興しかけたらしい。たとえば、引用した菅原の記事も三年を越える長期連載であったし、また、医学者、医学史家として著名な富土川遊なども、子どもの性欲について積極的な発言を始めていた。しかし、それらに対する教育学あるいは教育者の側からの反発も強く、『教育学術界』第一八卷第三号には、文学士龍山義亮による「性欲

教育問題に就いて」と題された反論が掲載され、富土川やマルクーゼの見解には賛同し難い旨が述べられている。

わが国の子ども関連業界に、どのような事情で「性欲論」が導入されたのかその経緯は判然としなない。しかし、子どもを対象化し客観視しての「子ども研究」が軌道に乗り始めるにつけ、彼らもまた、幼いなりに性的動物であり、性的行動と無縁ではないと認識され始めたのではなかったろうか。そして、そうした認識の背後には、ヨーロッパの異端的ニューウェーブ、G・フロイトの名前がちらついていたのかも知れない。いうまでもなく、性欲教育に関する言及のすべてが、フロイト理論を直接的に参照していたわけではないし、また、否定論にしても、格別、フロイトを標的としているわけではない。しかし、賛否両論ともども、恐らくは「子どもにも性欲を認めるべき」とする新しいヨーロッパの

風に髪をなぶられていたことは確かであろうし、間接的ながらそれに触発されての「小児性欲」への注視であつたらう。

ところで、ここで見たように、幼児性欲論に対しては、すかさず反論が提示された。しかも、これらの反論には「劣情」とか「羞恥心の毀損」とかいう道学者的言辞がちりばめられ、結果としては、高等教育の場は別として、それ以下の対象に関しては性欲論およびその教育は不問に付すことこそ妥当とされているのである。

とすれば、「幼児性欲論」は、「性欲」を「劣情」や「羞恥心」の類縁関係におく道学者的教育観によって退けられたということになる。ここに反映されているのは、当時の子ども関連業界でのフロイト受容の限界かも知れない。つまるところ、それは、わが国流の子ども観と合い入れぬものとされ、触れぬこそ賢明とばかりに葬り去られたのである。先に述べ

たように、遅れてきた湖畔詩人たちの周辺から、「子ども賛歌」が澎湃と沸き起こってきた時代でもある。

「無垢」と「純真」の代名詞のような子どもの言動が、その実、「性欲の発動」に過ぎないと考えることは、当時の人々の子どもへの想いを裏切るものに見えたと相違ない。

パラダイム・チェンジと

保育界のニューウェーブ

冒頭で触れたように、一九七〇年代に、子ども関連の人々は精神分析的解釈に寛容になり、それどころか、積極的な関心をすら示し始めた。しかし、この動きは、必ずしも、フロイト理論そのもの、特に「幼児性欲」を、関連業界が承認したということ



意味するものではない。むしろ、私どもはここに、子ども関連者たちをも無自覚のうちに絡め取り始めたパラダイム・チェンジの動きを見るべきであろう。それは、一口に言うなら、理性中心主義・科学主義・合理主義への疑念と、身体性・情動性・非合理なものへの接近とまとめることが出来るかも知れない。

先にも触れたが、子ども研究の王座は、今世紀に急成長した科学主義的児童心理学によって占められていた。教育も、これら児童心理学の結果に立脚して、科学的であることが求められた。教育の世界も例外ではなかった。単なる観念に依拠するのではなく、科学的データに立脚して実証的であることが当為とされ、教育調査や教育実験の結果が教育実践に応用されるだけでなく、現場研究もまた、科学的であろうとして短期間で実証可能な問題にのみ焦点を合わせ、「研究のための研究」と批判される

傾向も発生したりしている。

しかも、それら客観性の保証が数値によってなされたため、研究は、さながら、動的で多層的な現実を「数」という単純な表現に置き換えることのように、錯覚される風潮すら生じかねないありさまであった。大型計算機と多変量解析手法の発達か、この錯覚に拍車をかける。複雑で動的な現象が数量変換性という視点から分節化され、その抽出部分が数量に変換される。そして、これらの数たちの運命が大型計算機に委ねられ、そのなかで行われるもろもろの処理の結果が、研究仲間の眼前にある「数値」として提供されるとき、これこそが動かし難い「客観的真理」であると仲間たちを納得させたのであった。

しかし、こうした動きに対して、深層に胎動し始めた異議申し立てが、密かに探り当てた別の視点の一つが、先の深層心理学的視点と言えないだろう

か。非合理と言えば非合理、科学的でも客観主義的でもなく神秘的で謎めいたユング心理学が、大衆の注視のなかに迫り出してきたのも、恐らく、こうした動きと無縁ではなく、追求され続ける数量主義とは、ポジとネガの關係に位置する。

保育研究の世界にも、漸く新しい蠢動が見え始めたのが、この時期でもあった。数量化されないものなかに、掛け替えない真理が潜むのではないかと、あるいは、研究者から「観察されるべきもの」あるいは「実験されるべきもの」として切り離された「子ども」と、保育現場で保育者と生を共有する關係的存在としての「子ども」は、同質であり得るのか否か、など、科学的研究の名の下に操作され、時には切り捨てられざるを得なかったものもろくに光りが当てられ、それらまるごとの現象をまるごと思索することこそ「保育研究」と呼ばれるべきではないか、と、改めての問いが提出されたのであった。

「保育研究」に起こったこのニューウェーブに関しては、ここでことごとく論じる必要はないだろう。私どもの極く身近に、この三〇



年ほどの間に起こった研究の動向を想起することは容易である。現象学的保育研究、とりわけ津守真らによる一連の研究、現象学的と呼ばれるにまして、実践・思索の反復型などと位置付けられることもあるが、それらは、いまだには保育界の主流となり保育研究の指針とすらなつて高く評価されている。あるいは松村康平の提唱などその先駆的な例と言えるが、その後広く敷衍された關係論的視点、さらには、エスノメソドロジカルな子ども研究など、いくつかの用語とカテゴリー概念は、当初の新奇さを越えて、いまや私どもの耳に親しいものとなりつつある。そして、それらのすべて

を引くため、客観主義一辺倒の数量化による科学主義の効用と限界を自覚する心性の広がり認めることが出来よう。

先に触れた精神的な視点、あるいは、深層心理学的視点というべきかも知れないが、それらも、こうした心性の変化と連動する。ユングという人は、さらに日本の河合隼雄は、昔話は人間の深層世界の反映であるとして、そのなかから「母なる者」のイメージや「心的通過儀礼」のありようを探り出して見せる。さらには、この派の人々は、治療をクライアントとセラピストが共同で紡ぎ出す「物語」であるとし、それを物語的に綴り解釈することを提唱する。科学主義というにまして文学主義とでも呼びたいこうした考え方が、いつか、さほどの違和感もなく受け入れられ、やがて、「保育の物語的把握」などという概念すら通用させてしまった。そして、こうした動向の端緒が、一九七〇年代にあった

ことを考えるなら、子ども関連業界は、遅ればせながらこんな形で、パラダイム・チェンジの動きに添えてきたと言うべきかも知れない。

「子ども論」の活性化

いま一つ、振り返る視界に浮かび上がるのは、一九八〇年代における「子ども論」の活性化現象であろう。今世紀半ば以降、「子ども」は、発達が語られ教育や養護が議論されるそのときに、始めて、対象として主題化されるものであった。つまり、今世紀初頭を彩った「子ども賛歌」が影を潜めて以来、「子ども」は、文学や絵画の世界を別とすれば、「子どもという存在そのもの」として単独の主題となる機会を失ったのである。

しかし、その「子ども」が主題として復活してくる。「子ども学」という用語が試行的に使用され、大人と世界を共有する異質の存在が注視される。村

瀬学、小浜逸郎らの子ども論や拙著が、その内容を越えて異常なまでの注目を浴び、子ども関連業界の外にあふれ出して広く話題を呼んだことも、こうした現象の一端と位置付けることが出来るよう。

メディアのレベルで言えば、従来は、日刊紙の一般書評欄に、子ども関係の著書類が取り上げられる機会は稀であって、それらは、しばしば、「家庭欄記事」として紙面を賑わすのが常であった。しかし、このころから、そうした一種の差別とも言うべき扱いが撤去される。先に引いた村瀬・小浜・本田などの著作は、いずれも、他の一般書と並んで書評の対象とされ、論議の種とされたのである。言うまでもなく、日刊紙に取り上げられることと、そのものの評価は別である。しかし、少なくとも、「子どもを語ること」が、片隅にくすぶるマイナーで特殊な行為であることから解かれて、「大人」や「社会・文化」を語る他の諸領域と、肩を並べるところま

で失地回復したことだけは認められてしかるべきであろう。

さらには、従来「子ども

も」と無縁と見えた哲学者や文化学者、あるいは評論

家たちのなかに、「子ども」を視野に入れて論を立てる人々が目立ち始めたのも、この時代である。わが国の場合を例にとれば、哲学者の中村雄二郎や文化人類学者の山口昌男、国文学者の前田愛、あるいは、民族学者宮田登、宗教学者山折哲雄などを上げることが出来る。これらの人々は、それまでは格別「子ども」関連の学問や事業に携わることもなかったのだが、このころから、おりに触れて「子ども」に言及し、あるいは、その専門的論稿のなかで「子ども」を主題化するなどして、従来とは異なる「子ども」への関心を示し始めたのであった。しかも、



この人々は、いずれも、「ポスト・モダン」などと称されたこの時代の、オビニオン・リーダー的立場にあった人々であったことも特記に値いしよう。

とりわけ、評論家柄谷行人の「子どもの発見」を論じた一文は、多くの人々に注目され大きな反響を巻き起こした。それは、近代の作り出した諸制度の起源を問うまなざしによって、「子ども」をも捕らえ返す試みであった。彼によれば、現在、私どもの眼前に存在する「子ども」とは、前近代とは記号的布置の変化した近代的心性によって発見されたものに他ならない。発見の結果として、彼らは凝視され輪郭を与えられて、「子ども」というカテゴリー内に収められる存在と化したのだ。というわけで、私どもに「子ども」と見える彼らは、近代社会によって虚構され粹付けられた、一種の「制度」であるという主張であった。

同じこの時期、私どもは、フランスの歴史学者 p

h・アリエスの『アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』（邦訳題『八子ども』の発見）と題された論稿に触発され、大きな衝撃を受けている。すなわち、生物学的実存在としての子どもと、時代のまなざしの所産としての「子ども」との差異に気付かされたのだ。上記柄谷の論稿は、アリエスを踏まえたものではないとのことだが、アリエスのそれと響き合うものを持ち、「子ども」の周辺にうねり始めた時代の流れを感じさせるものがあった。アリエスの言を借りて言えば、「子ども」に注がれる「まなざし」が、少しずつ少しずつ、変わり始めたのである。

（聖学院大学）